

[004]社会教育研究紀要表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/6757892>

出版情報：社会教育研究紀要. 4, 2022-05-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

はじめに

岡 幸 江

本研究室第4号となる『社会教育研究紀要』を、ここにおとどけしたい。今号から、編集体制や内容を大きく刷新している。これまでは特集中心の構成で不定期刊行だったが、今号から査読体制を伴う院生の論文投稿を中心とし、あわせて特集を掲載する構成としている。昨年の第3号刊行から約1年後の刊行が実現したが、今後も年1回の刊行をめざしている。第4号には論文1本、研究ノート2本がよせられた。この査読には、学外の社会教育研究者のご協力をあおいでいる。記してここに深く御礼申し上げたい。また今号の編集に、院生の中山博晶さんが主要な役割を担い、他院生のサポートも得ていることも、記しておきたい。

現在本研究室には、大学院に博士課程院生2名、修士課程院生6名（昼間4名、社会人2名）、研究生1名、交換留学生1名が在籍し、学部には3・4年ともそれぞれ3名が在籍している。着任10年をこえてようやく院生の数と幅が豊かになり、議論も活性化してきたことを、院生と学部生の深い交流も持続できていることも含め、ここから嬉しく思っている。今年はこの院生集団で、2022年度日本社会教育学会紀要第58巻掲載の「研究動向」執筆が実現した。進んで学会に申し出たことで1年間の準備期間を得たため、博士課程院生を中心にじっくり議論と資料収集をしながら共同執筆をすすめることができた。研究動向を今後どうするかは学会でも議論になっているが、院生が研究を学ぶ場としては貴重だと、現在の研究室の様子からも、筆者自身の経験からも、思うところ大きい。

なおコロナ禍のひとつの遺産に、オンラインの授業体制が整ってきたことがある。現在火曜の昼間院授業および研究指導ゼミは対面中心、木曜の夜間院授業はオンライン中心ですすめているが、対面の場合もオンライン参加も可能としており、社会人や入国がまだできない留学生にとっては大学院参加の幅が大きく広がった。院生研究生9名中3名が、現住所は関東や関西である。実りある研究体制の構築においてどこまでオンラインのみでいけるのかまだ模索段階だが、少なくともこれから大学院というありかた自体、構成メンバーも研究教育の内容方法も、柔軟に大胆に変えていくことが求められている。何より目の前の状況がそれを教えてくれている。

また今号の特集は、コロナ禍下社会教育関連施設調査の第2弾となる、久留米市調査である。昨年度の第1弾は福岡市調査でこれは市内公民館への配布を意図して紀要でなく別冊でまとめたが、今年は紀要にくみこむこととした。今回の調査は、筆者も深くかかわってきた日本公民館学会コロナ特別プロジェクトの全国調査のとりくみと、この間学部授業・ゼミを中心に、「久留米オンライン公民館」のとりくみと交流を積み重ねてきたことが背景にある。また、コロナ禍1年目の福岡市調査ではまだ「コロナ禍で何ができ、何ができなかったのか」とその延長上の新たな萌芽をくみとることが中心だったが、2年目となった今回調査は、結果的に「新たなコミュニティ像の探求」が主テーマとなった。筆者はとくに学生たちとオンライン公民館メンバーにグループインタビューにいったときの衝撃と、学生たちと共有した高揚感を忘れられない。単にオンラインリアル化という次元のみならず、これからの働き方、仲間づくりもリアルコミュニティとのつきあいも、すべてにおいて新たな芽を感じた。またそれを、誰か突出した人々の動きとしてではなく、若い世代が希望をもって深く共有していたことが印象的でもあった。その果は本号に調査報告としてまとめるとともに、2022年夏の社会教育研究会九州集会のご当地分科会「学生交流分科会」の実践へとつながっている。

このほか本研究室メンバーは、毎年夏の社会教育主事講習をひとつのあらたな社会教育像をつくりだす実践として社会にひらき、実践的に向き合っている。韓国やドイツの研究室との交流もすすみつつある。いずれもまだ未成熟だが、今後も国内外の研究室・研究者や、社会・実践へとひらかれゆく研究室をめざし、発信のありかたも模索していきたい。一層のご指導ご鞭撻をお願い申し上げたい。

2022年5月